

雨の降る季節ですね。

雨は、ある時はしとしとやさしく、ある時ははげしく、地上に降りそそぎます。

『法華経』の中に、「甘露かんろの法雨ほううをそそぐ」という言葉が出てきます。

「甘露かんろ」は、「甘い露あま つゆ」と書きます。これは、古いインドの言葉「アムリタ」を訳したもので、「最上の味をもつ飲み物」をいいます。

「法雨ほうう」は、「法の雨」と書きます。法は、「法律」の「法」という字ですが、この場合、古いインドの言葉「ダルマ」の訳で、「お釈迦さまの説いた教え」という意味です。

「甘露の法雨をそそぐ」というのは、「甘露のような最上の味をもつ、お釈迦さまの教えの雨をそそぐ」という意味なのです。

お釈迦さまの教えを、雨たにと喩ええたのです。

なぜ雨なのでしょう。

雨は、ところを選ばずに降ります。降るならここがいいとか、ここに降りたくないといった選り好みえ このをせず、あまねくあらゆる場所に降りそそぎます。

お釈迦さまの教えも同様です。あらゆる人々の苦惱くのうに、選り好みをせず、音もなく降る雨のように、あまねくそっと降りそそぎます。

また、雨は、乾ききったいのちうるおに潤いを与えてくれます。いのちにしみわたり、そのありようをしっかりとしたものにしてくれます。

お釈迦さまの教えも、草木くさきをうるおす雨のように、乾ききった私たちの心に潤いを与えてくれます。私たちの心にしみわたり、安らぎへとみちびいてくれるのです。

さらに、例えば、燃えさかる炎ほのおが大地おほを覆っている時、雨が強く降りそそいだならば、その炎を消し止めてくれるでしょう。

私たちの心ほんのうが、煩惱ほのおの炎に覆われている時、お釈迦さまの教えが、はげしい雨のように降りそそいで、怒りや欲望よくぼうの炎を消してくれるのです。

悩み苦しんでいる私たちが、お釈迦さまの教えにふれ「甘露の法雨」がそそがれた時、私たちは、雨上がりの青空のような心に、きつとなるのです。